

山でのお酒に思う

OWCC 中川和道 20190314

お酒を飲まない登山者にわりとたくさん出会う。類型に分けると、まず第1群は登山を職業とするいわゆるプロの人々、第2群はプロではないが記録達成を目指すアスリート系の人々だ。日本の山岳ガイドの方々は結構お酒をたしなむから、第1群のなかでも異色の存在だ。スポーツ選手やスポーツ愛好家でお酒をたしなむスポーツはあるのかと考えた。中川が思うに、登山と相撲くらいだろうか？皆さんはどう思われますか？

1984年に近藤和美氏と3人でパミールの高峰コルジェネフスカヤ7105mとレーニン峰7135mに登頂した[1]中川は、その国際キャンプで初めて（旧）ソ連邦のスポーツマスターと呼ばれるプロのエリート登山家たちと出会った。彼らは、ソ連邦国内の7100m峰を、毎年2つ以上登頂を続けてポーツマスター称号を維持するのだと語っていたから、その努力は大変なものだ。夕食のあと彼らは国際登山隊と宴会に興じてくれるのだが、決してお酒を口にしない。紅茶を飲んで楽しく騒ぐ。えらいものだと感心した。

また、2017年に行った西ネパール[2]のシェルパたちも、決してお酒を飲まない。シェルパの若者が今年2019年2月に初来日したので、灘の酒蔵レストランで当時の仲間との交流会をもった。彼は見事にお酒を飲まない。日本の食文化には触れてもらえたが、さすがにお酒は香りに接していただいただけだった。

一方、（旧）ソ連邦の国際登山キャンプを支えているスタッフ達となると、お酒に対する態度は一変する。ヘリやトラックで荷揚げした荷物の中にはビール箱がもちろんあって、キャンプ終了の打ち上げパーティーの日ともなると、彼らもビールを飲み、ギターを弾き、歌い、楽しんでいた。中川や近藤さん達も混じったのだが、何と、直射日光にさらされたくぼ地に山積みになって、熱く昇温したびんビールを炎天下で飲むのだ。中川にとってこれは初めてだ。ところが、数週間の酒絶ちの後だけあって、これが、何と、うまい。7100m峰を2つ登った達成感も手伝ったのだろう。大感激だった。あの時の感激を思い出したくて、日本でも大きな登攀のあとに「熱いビールを飲んでみたい」と願うのだが、まだチャンスに恵まれていない。

今までで一番おいしかったビールは？と問われると、2013年5月4日のビールだ。連休にOWCC松田明博さんと剣岳小窓尾根からチンネを継続登攀した。2日目は吹雪の中を悪戦苦闘して小窓尾根の頭に。吹雪のホワイトアウトの中、雪洞を掘った。ザックをおろし一息ついたとき、何と、松田さんのザックからビールが出てきた。それが、凍る寸前のトロツとしたビールだった。体のほてりが熱い時に飲んだこのビール。何と言ってもこれが最高だった・・・。

あ、やっぱり、中川はアスリート登山者にはなれないみたい・・・。

[1]近藤和美「NO LIMIT 限りなき山行」、登山時報、2019年1月号—3月号連載中。